架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻（五・了）

田口　寛

はじめに

本稿は、梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』（本誌既刊号）や梅光学院大学『論集』に掲載してきた拙稿「架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻」四篇[1]の続きであるとともに、最終篇である。軍記『鎌倉大草紙』の架蔵写本について、本稿（五）は、第五六丁オモテ初行から第六八丁オモテ末行までの、一二丁半を収めることとする。第六八丁オモテの終わりは、従来『鎌倉大草紙』の「下巻」といわれている部分の終わりと同じであり、諸伝本の擱筆部と一致する。

本稿の今回翻刻した部分から、その本文特徴を、前稿に補足するかたちで取り上げたい。

一　本稿翻刻部分から窺われる本文特徴

本稿の翻刻部分から取り上げたいのは、次の二点である。

まず一点目。

①（六六ウ六行より）其後、胤直の一跡として実胤を千葉介に任し、上杉より下総へ指遣といへ共、成氏より孝胤をひいきにて千葉庄×をかれける間……　※句読点等は稿者による（以下同じ）。

例①は、彰考館本・『群書類従』所収本を含む諸伝本にはいずれも×印部分に「に居」という文字が入るが[2]、池田可軒本・坂田本・北海大本・村上本には架蔵写本と同様、見られない。このことは、所謂「二巻本系統」（稿者の分類・呼称する「彰考館本系統」）の中でも、上記の四本間において複数の共通要素が見られるとした、拙稿「早稲田大学図書館新収「異本鎌倉大草紙」解題――東博本系統本文の特徴紹介として――」[3]や前稿二及び四における記述の一部と符合している。しかし、これらの拙稿においては、上記四本における複数の共通要素が「東博本系統」（稿者による分類・呼称）の本文においても共通することを強調したのに対

し、例①は東博本系統には、「に居」の文字が見られることから当てはまらない。

さらに二点目。

②（六七ウ一行より）道灌は帰陳して、大田図書助と千葉自胤、両大将にて攻戦ふといへとも、寄手は小勢に〔て〕叶はす。管領、御馬を寄られ可然由望む×といへとも、勢を分ヶ、上総の国長南の城主、武田三河守入道を責けれは……

例②は、諸伝本にはいずれも×印部分に、「といへとも是も延引し敵は要害能して力落に難落しかり」（引用は『群書類従』版本による）という本文が入り、これが転写時の目移りによる誤脱であろうことは容易に想像がつくが、全く同様に脱落しているのは池田可軒本・坂田本・北海大本の三本のみで、村上本は異なる。それでは村上本には脱落がないのかといえば、そのようなことはなく、村上本は、「といへとも、寄手は小勢に〔て〕叶はす。管領、御馬を寄られ可然由望む」から、「といへとも是も延引し敵は要害能して力落に難落しかり」相当部分までが脱落しているのである。これもまた目移りによる誤脱であろうが、単にこの部分が誤脱を招きやすい箇所であるのか、村上本に対して前述三本が親本的位置付けにあることを示唆し得るのか[4]、俄には判断しかねる部分である。そして例②もまた、東博本系統には「といへとも、寄手は小勢に〔て〕叶はす。管領、御馬を寄られ可然由望む」の部分も、これに続く「といへとも是も延引し敵は要害能して力落に難落しかり」相当部分も見られ、前稿四の注（3）に「東博本系統が部分的に架蔵写本・池田可軒本・坂田本・北海大本の一群に近いという現象は、……（稿者略）……一群との接近自体があくまで部分に留まることになる」と指摘したことと同様の結果が見出されるのである。

以上、本稿は架蔵写本とその周辺の伝本に特有の本文特徴について、極めて些末な問題を取り上げるに留まったが、数回にわたる紹介と翻刻の意義は、そこのみに終始するものではない。本作品に留まらずその関係作品・周辺作品の更なる様態把握を、機を改めて進展させてみたい。

二　架蔵写本『鎌倉大草紙』翻刻

【翻刻凡例】

一、本文は、架蔵写本『鎌倉大草紙』の翻刻である（完結）。

一、用字は通行の字体を用いたが、異体字をそのまま再現した部分もある。誤字と思しきものも可能な限りそのまま翻刻したが、一々に断らなかった。濁点の有無も原本のままである。外字・難字は◆記号にて表した。「より」等の合字は、これも断りなく開いた。

一、原本の改行はスラッシュ／にて示し、改丁・改面は末尾に（2オ）の形式にて示した。

一、原本は一つ書き形式において、「一」の字を次行以下より一

段高くして書き始めているが、翻刻においてはその書式を再現しなかった。

一、書入は、本文とは別筆と見られるものは、翻刻に反映しなかった。

一、原本の欠脱と思われる部分には亀甲括弧〔　〕を入れ、括弧内を『群書類従』版本にて補った。ただしその際には他の同系（彰考館本系）本文も参照し、補入は最小限度に留めた。

一、適宜、括弧（　）にて注記を施した。

【翻刻本文】

猶以成氏を背く者なしいか様京都公方の御子を／壱人関東の主として御下向ありて関東の公方と／定彼御下知に非すは関東治りかたきよし諸家言／上しける間此儀尤可然と将軍家の御舎弟香厳院／殿と申て禅僧にて天竜寺に御座有けるを長録／元年十二月十九日廿三歳にて俗に帰し申左馬頭／政智と名付上杉中務丞（ホカ）為上使同治部少輔政憲南伊／予守飯河河内守布施民部大輔木戸三河守孝範等御／供にて同月廿四日伊豆国まて御下着有三島の大明神へ／御参詣有彼神前ニおゐて御元服有けり木戸三河守孝／範御加冠治部少輔政憲御理髪にて有ける孝範は冷泉中（56オ）納言持為卿の門弟にて無双の歌人にて有けれは一首の／和歌を詠し大明神へ献上して公方の御運を祈けり／

我君の初元結ひの黒髪に千代ふる霜のしらかなるまて／

鎌倉には御所もなく要害あしく敵地も近けれはとて／伊豆の北条に堀越と云所かりに屋形を立伊豆の国を知／行せらる先為名代上杉政憲箱根を越して武州相／州上州の一揆を下知して房顕に力を合ける房顕／武州五十子（イカツコ）といふ所に陳取成氏衆と対陳して／日々夜々の合戦なり伊豆の国は昔より源氏重代の／国なり頼政仲綱の以後子孫代々守護たり但二位禅尼／の御時武田信光も此国を給り十ヶ年程居住有とかや（56ウ）其後又頼政の子孫給り多田治部少輔とて三代相続有／此人の建立しける中花山禅長寺と号して頼政以／来の木像あり河内と云所にて山の堂とも頼政堂（ヨリ）共／申て于今有尊氏公の御代に畠山阿波守国清其弟／尾張守二代関東の執事にて此国の守護なる彼人の／建立の寺瑞竜山吉祥寺と申に今有木像も有之其後／上杉山の内憲顕に給りて代々関東の管領也今また／堀越殿関東の主君として北国へ御下向有然らは／当国は関東に吉例有る国ニて源家有縁の所也／其頃寛正元年正月朔日天に二の日出末世の不思儀と／謂つへし京都には畠山両家諍論ありて合戦有（57オ）寛正七年二月十一日山の内兵部少輔房顕五十子の陳中／にて早世す法名大光院清兵道純と申已に堀越殿御／下向有近日越山あらは両上杉と一同に御方より蜂起し／て成氏を責落し東国平均に可治よし諸家勇／みける所に山の内殿早世の間力を落して越後国上杉／相模守房定の二男顕定を招房顕の妹婿（イモセ）として一跡／可令相続よし長尾扇谷へ相談し豆州政智の御／下知を請顕定を山の内殿に移しける其年九月三日／改元有て年号を文正と号す其翌年

より京都に／大乱起り畠山の両家并細川山名権威を諍ひ合戦／止時なし同年九月六日上杉弾正少弼入道持朝川越ニ（57ウ）逝去五十二歳法名広感院殿道朝と号す此人上杉両家／の古老にて諸家も重んし渇仰の首を傾しに／かくあへなく捐館し給へは伊豆の御所も関東の諸／家も力を落し忙然たり東下野守常縁は千葉／退治の検探として下総国に下向し康正元年／より東の庄に居住し所々の合戦に打勝京都の／御感に預りける所に京都にて乱起り常縁か美濃／国郡上の城を山名方より打入て応仁二年九月／六日に責落され同国の住人斎藤持是（院）法印妙椿／と云人悉く押領しける常縁関東にて是を聞／此所は常縁か先祖中務入道素暹承久二年初て（58オ）拝領の旧地也代十世に及て終に他人は知行せ／さりけるを我代に至りて思ひの外に東国ニ下向／してケ様に成行ける事無念といふも愚なり其／折しも亡父式部入道素明かために追善の法事を／営み僧を供養しけるか代々和歌をたしなむ／家なれはかく思ひ続けり／

あるうちにかゝる世をしも見さりけん人の昔のなをも／恋しき／

浜式部少輔春利（総州士気東金先祖）此歌を聞て哀にたへす／思ひけれは京都へ便有ける時兄（の）浜豊後守康慶か許へ／書て送りける康慶此歌を感して歌を好む人々／に見せもてはやしけれは斎藤明椿伝へ聞て常（58ウ）縁は元より和歌の友人也と（今カ）関東に居住して本領かく／なり行事いかに本意なき事に思ひ給ふらん我も／久敷此道の数寄なれはいかてか情なき振廻をなさん／や常縁歌をよみて贈り給はゝ所領元のことく返し／なむと康慶に物語しけれは康慶舎弟春利か方へ／此由を申送る春利大に喜ひ東野州へ来て舎兄／豊後守の消息を取出し是御覧候へかゝる乱世の／末代にも都にはゆうにやさしき人こそ候へ〇見（目に）へぬ／鬼神をもやわらくるは和歌の徳と承り候御詠草一／首をくりて御覧候へかしと申けれは常縁元より／達者にて十首の歌を詠して春利に渡す春利（59オ）則取次て美濃国へそ贈りけり／

堀川や清き流れをへたて来て住かたき世を歎く斗（計カ）そ／

いかはかり歎くとかしる心からふみ迷ふ道の末のやとりを／

かたはかり残さん事もいざかゝるうき身はなにと敷島の道／

思ひやる心のかよふ道ならてたよりも知らぬ古里の空／

便りなき身を秋風の音ながらさても恋しき古里の春／

さらにまたたのむにしりぬうかりしは行末遠き契り成／けり／

木の葉ちる秋の思ひにあら玉の春に忘るゝ色を見せなむ／

君をしもしるへとたのむ道なくはなを古里や隔はてまし／

みよし野に鳴雁のいざゝらはひたふるに今君そより（に）来む／

我世経んしるへといまも頼む哉みのゝおやまの松の千年を（59ウ）

返し　　持是院法印妙椿／

言の葉に君が心はみつくきの末行遠く跡はたかはし／

同し時康慶のもとへ遣しける　常縁／
和歌のうらや汀のもくつ〳〵にも猶数ならぬ程そ見へぬる／
霧こめし秋の月こそ余所ならめかさしに匂へ古里の花／
返し　康慶／
和歌浦や汀のもくつ〳〵にも見へす読かく玉の光りに／
帰り来ん君がためとや古里の花も八重たつ錦なるらん／
此年二月（二日）よりかく申かよはしける間達上聞けれは／御免許有下総国には子息縁数をとゝめ四月廿一日東／野州は上洛して五月十二日に持是院妙椿に対面して（60オ）本領を受（取カ）◆打入けれは（ヤハリ）妙椿の許にて／
世の中をとをくはかれは東路にいま住なからいにしへの人／
使を立なから返し　常縁／
世の中をとをくはからばけふまでに君が言葉の花におくれ／し／
又領地より妙椿へ送る　常縁／
古里のあるしをみてもまづぞ思ふしるへあらすはいかゝわけ／こむ／
返し／
此ころのしるへなくとも古里に道ある人とやすくかへらん／
（この一行空白）／
応仁文明の頃政知（は）伊豆の堀越に居住有成氏は下総／の古河の城にあり両御所にて両上杉は堀越の味方ニて（60ウ）成氏と合戦武州総州の成氏の味方の者共文明三年／三月箱根山を打越伊豆の三島へ発向して政知を／せめんとす政知小勢にて駿河より加勢を請三／島へ人数を出し防戦ひける政知の軍無利して／已に敗軍に及ひける処に上杉被官矢野安芸入道／政知に加勢して新手にて馳来けれは成氏方の／先手小山結城の兵一戦に打負山を越敗軍す此方に／山内顕定宇佐美藤三郎孝忠に五千余騎を打添道に／待請散々に責けれは成氏方千葉小山結城等残少ニ／打なされ古河へ帰城しけり文明三年三島にて公方／衆の軍理なふして上杉方勝に乗同五月長尾（61オ）景信大勢を引卒して古河の城へ向城中の兵共／沼田高三浦の者とも馳出爰を先途と防けれ共長尾／大勢入替攻けれは六月廿四日遂に落城して成氏／千葉を差て落行孝胤を頼給ふ此時諸軍／散々に成行けれ共結城の人供奉す房州の里見／上総の両武田小金の原其外近国の勢馳集て／是を守護す両上杉は猶五十子に旗をたて成氏／の味方を悉く退治しける然とも古河に野田／関宿に築田私市（キサイ）の佐々木其外那須結城いつれも／無二の御所方にて翌年の春千葉より成氏公御／発向有て古河の城を責落し終に御帰参有けり（61ウ）扨又五十子へ御勢をむけられ合戦止時なかりけれは／文明五年十一月廿四日上杉扇の谷の大将修理太夫／政真も打死也行年廿四歳此人はいまた子なかりし／かは一家の老臣共評定（ヒヤウ）（「評」の右傍「ヤ」の字は「ヨ」に「ヤ」を重書）して故持朝の三男定政を／修理太夫に任し扇の谷の家督となす扇の谷の／家務は太田左衛門入道道灌山の内の家務長尾左衛門／入道死

去の間長尾尾張守忠景ニ顕定より被申付爰に／長尾四郎左衛門尉（左衛門尉景春は忠也）景春は長尾一家の大名にて有勢の／者也殊に老父玉泉庵（腹カ）忠功異他然間景春我こそ／家務職を可承処に忠景に被越天性服悪敷男ニ而／逆心忽に思ひ立顕定を可亡企密ニ存（知）立縁者たるの（62オ）間大田道灌に此事を相談す道灌是を聞て／一大事出来ぬと思ひけれは顕定の前に来り（て）申けるは／景春もとより無器用にて御家督職は無及候へ共／父玉泉か忠節を思召候はゝ武蔵の守護代を被仰付／まづ忠景と和談仕忠景も暫時辺土へ相退かれか／心を相静て御陳中無為の御謀可然候彼か家来／被官人等狼籍（腹カ）の族追日令増倍候間定而近日御難／儀不可遠之よし申といへとも山内を初て評定人とも／更に何も承引せすしからは御簾を向られ景春を／被誅候はんに何の子細か候半（へきカ）（出相）と申といへとも其かひなし／其年駿河国に騒乱あり今川殿扇谷の縁者なり（62ウ）其上伊豆の御所より御催ありて（出相）暖のために太田左／衛門太夫同年六月足柄山を越駿河へ発向して同／十月に帰宅す其間に長尾景春武州鉢形の城へ／移り武州相州の内一味同心の兵を催し不日ニ思／立五十子の陳へ押寄て両上杉を襲ける間文明／九年正月十九日の夜顕定憲房定政三人小勢ニて／は叶ふまし上野へ打越大勢を催し景春を可退治／とて太田道真を殿にて利根川を渡り那波（の）庄へ／引退景春一味の族には武州豊島郡住人豊島勘／解由左衛門尉同弟平右衛門尉石神井（シャクシ）の城練馬（ネリマ）の城を／取立江戸川越の通路を取切相州には景春か被官人（63オ）溝呂木の城にたて籠る越後の五郎四郎は小磯といふ／山城にたて籠金子掃部助は小沢と云城に楯籠る間太田／左衛門入道下知として扇谷より勢を遣し同三月十／八日溝呂木の城を攻落す同日小磯の要害を責らる／一日防戦ひ夜に入けれは越後の五郎四郎かなわすして／城を渡して降参す夫より小沢の城へ押寄責けれ／とも城難所にて難レ落河越の城には太田図書助資／忠上田上野介松山衆を籠め江戸の城には上杉刑部少輔朝／昌三浦介義同千葉次郎自胤等を籠らる景春一味の／宝相寺并吉里宮内左衛門尉以下小沢の城の後詰の／ため横山より打出当国府中に陳取小山田か城を攻落（63ウ）して矢野兵庫助を大将として川越の城おさへの／ために苦林と云処に陳を取是（出相）を見て川越に籠る／太田上田等同四月十日に打出けれは矢野兵庫助其外の／小机城衆勝原と云所に馳出合戦しける敵は矢野を／初として皆悉打負深手負て引退同月十三日道／灌江戸より打て出豊島平右衛門尉か平塚の城を取巻城／外を放火して帰ける所に豊島か兄の勘ヶ由左衛門を／頼ける間石神井練間の両城より出責来けれは太田／道灌上杉刑部少輔千葉自胤以下江古田（エゴタ）が原沼袋（イケブクロ）と云／所に馳向ひ合戦して敵は豊島平右衛門尉を初とし／板橋赤塚以下百五十人討死す同十四日石神井城へ押（64オ）寄責けれは降参して同十八日に罷出対面し／て要害破却すへきよし申なから又敵対の様子に見へ／けれは同十八日に攻落す金子掃部助か籠ける小沢の城も／同日攻落す長尾景春は上州勢を引卒して五十子／梅沢と云所に陳を取太田道灌所々の軍に打勝て／上州那波の庄へ両上杉の迎に来り同五月十三

日利根川／を越五十子へ帰陳す長尾景春是を見て引退けるを／両上杉忠景太田道灌板倉美濃守大森信濃守以下／用土原へ押掛合戦して悉打勝忠春は鉢形の城へ引／退残少く打なされける間鉢形（虫損）を責落へきにて両上／杉は富田四方田甘糟原に陳を取ける同七月の初古河（64ウ）の成氏公数千騎を引卒して景春か後詰として／結城両那須佐々木横瀬御供にて滝（虫損）と云所へ御出張の間／両上杉も叶はすして上州の白井へ引退て陳を取／十月長尾景春同六郎為景公方より加勢ありて／荒巻と申所へ陣取道灌塩売原へ陳取切所を前に／当待かけけるに敵陣は引退て帰陳す其後明る／正月朔日簗田中務方より長尾左衛門尉方へ寺尾上／野介を使として上杉と御和談有へきよし申来る間／和談にて互に合戦をやめられ陳払あり其中に扇／谷の定政は道灌を相伴ひ（中道山）（一行に三字の割書）倉賀野より同正月廿／四日に川越へ帰陳す同廿五日豊島勘解由左衛門か平塚の（65オ）要害へ押寄攻けれは其暁没落して敵猶丸間城小／机城に籠る上杉定政は河越に籠り長尾景春は吉里／宮左衛門（内ノ本）以下相伴ひ大石駿河守か二宮城へ着陳して／小机の城の後詰をせんとす同三月十日川越の城より／二宮へ押寄攻けれは打負景春は成氏の御陣成田へ／参て千葉新介孝胤相催し羽生峰に陳を取同十／九日小机の陣より大田図書助（資忠）引かへし同廿日羽生に／向て定政にも出勢也孝胤景春一戦にも及はす引退／く大石駿河守楯籠二宮（の）城も降参す相州磯部の城（も）小／沢の城も自落す敵の残党奥三保と云所に楯籠候／太田道灌村山に陳を取舎弟（虫損）図書助同六郎大将と（65ウ）して奥三保へ馳向ふ敵（虫損）本間近江守海老名左衛門／甲斐国鶴瀬の住人加藤其外彼国境の兵共相催し／同十四日逆寄に責来太田図書助資忠先にすゝみ防／戦海老名左衛門尉を初として敵数多討取ける道灌も／村山の陳より押寄候所に敵は敗軍す追かけ甲州／の境を越加藤か要害へ押寄鶴河所と云所を放火／して帰陳す同十七日荒川を越鉢形と成田の間ニ／陳を取成田の御陣より簗田中務太夫以使申けるは上州／にて申合候ことく公方上杉御和談の間別義無之候へ共／景春は（御）近辺へ参り頻りに奉頼候間御難儀に思召候間景／春を押はらひ可然候古河へ御帰参被成度由申来る間（66オ）太田道灌馳向ひ候へは景春敗北す其間に成氏公利根／川を御越七月十七日に古河の城へ御帰座有顕定は鉢形の／城に天子の御旗をたてられ爰に居城也又千葉介孝／胤は先年父陸奥守入道常輝を相伴ひ故胤直兄弟に／腹切せ成氏へ奉公の人にて成氏より千葉一跡を給り／ける其後胤直の一跡として実胤を千葉介に任し上／杉より下総へ指遣といへ共成氏より孝胤をひいきにて／千葉庄（に居）をかれける間実胤は千葉城へ入部不叶して／武州石浜葛西辺を知行して時を待て居たり／しか世の中を述懐して遁世して濃州に上りて／閑居す其兄の自胤（虫損）を上杉（虫損）より取立実胤の跡を給り（66ウ）千葉介に住（にん）す武州の千葉と号す今度千葉介孝胤は／景春に一味して所々にて合戦し又成氏と上杉／と御和談之儀不可然（之）よし孝胤頻りに妨申し孝胤ニおゐ／ては御敵の随一也此時令退治自胤を取立て両総州／の侍を過半自胤へ付

て千葉一跡可令相続かため〔に〕／両上杉より加勢ありて成氏へ此由内意を得て太田／道灌下総国国府の台に陳取かりの陳城を構へける／同十二月十日孝胤は原次郎木ゝ内を先として下総／国境小金原へ出張す道灌馳向ひ合戦を初終日戦ひ／くらし孝胤は打負て木内原以下悉く打死す残／党は臼井の城に楯籠る明文明十一年正月十八日臼井の（67オ）城へ押寄る道灌は帰陳して大田図書助と千葉自胤／両大将にて攻戦ふといへとも寄手は小勢に〔て〕叶はす管領／御馬を寄られ可然由望む〔といへとも是も延引し敵は要害能して力落に難落しかり〕といへとも勢を分ヶ上総の国／長南の城主武田三河守入道を責れは七月五日降参／して自胤に帰服す丸ヶ谷の上総介も同自胤へ帰参ゝ／下総国飯沼も落城して海上備中守師胤も同／自胤へ降参す〔自胤〕千葉へ入部はなけれとも両総州の者大／形自胤へ帰服しける間先長陣なれは帰陣可有とて／七月十五日陳払の体を見て臼井の城より切て出けれは／太田図書助資忠取て返し攻戦けるか付入に打て入／城を終に責落しけれとも太田図書助を初僧中納（67ウ）言佐藤五郎兵衛桂縫殿助以下五十三人討死孝胤は敗北／すといへ共味方も長陣に労し続ひても責入らす／自胤は武州石浜まて開陣す然といへとも臼井城は／自胤へ領して城代をすへらるゝ（以下空白）（68オ）　（了）

注

（1）　一は『日本文学研究』四七号、二は『論集』四五号（以上、ともに二〇一二年一月刊行）、三は『日本文学研究』四八号、四は『論集』四六号（以上、ともに二〇一三年一月刊行）に掲載。

（2）　諸伝本は、厳密には「千葉に居をかれける間」となっており、「に居」を「庄」と誤った可能性もある。

（3）　『早稲田大学図書館紀要』五六（二〇〇九・三）。ＰＤＦ版 http://www.wul.waseda.ac.jp/Libraries/kiyou/56/pdf/09-taguchi.pdf「五　欠文について」。

（4）　前述三本及び架蔵写本には欠けていて、村上本には備わっている本文も見られる。例えば、架蔵写本の翻刻においては四七ウ一一行に補ってある、「使僧も空して下りけり」（『群書類従』版本による）という一文。前稿四及び前掲注（3）拙稿を参照。

付記

本稿は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・若手研究（Ｂ）／課題番号：ＪＳＰＳ科研費24720112による成果の一部である。